不登校児童・生徒支援事例報告書

不登校対応加配教員を活用した取組について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は中学校２年生の１学期までは登校できていたが、心境に変化があり、２学期から登校できなくなった。不登校なった明確な理由は、当該生徒本人にも分からなかった。

不登校となった後、週１回の放課後登校を続けることができた。また、担当教員との面談を重ねるうちに、登校したいという気持ちや学習をする意欲を出てきた。

具体的な取組

【登校支援委員会の設置及び登校支援会議の実施】

毎週登校支援委員会（各学年の不登校担当・養護教諭・ＳＣ・ＳＳＷ・校内別室指導支援員）を開催し、当該生徒の情報を分析して、指導・支援方針を決定している。

また、会議録を校内の全教員が閲覧できるようにし、共通理解を図っている。

【加配教員（特別支援教育コーディネーター）の役割】

・登校支援会議で支援方針を確認する。
・不登校の未然防止のため、構成的グループエンカウンターを推進する。
・ＳＣからＷＥＢＱＵのデータについて助言を得て、校内で情報を共有する。
・校内別室を整備する。
・以上のことを全教員に周知する。

【生徒の居場所作り】

教室に入ることに抵抗感を感じる生徒の学びを支援し、生活リズムを保つことができるように、自習できる別室を用意している。

可動式のパーティションも用意して、必要に応じて使用できる。

【ＳＣ、ＳＳＷ、他関係機関との連携】

登校支援の助言を得るのみならず、ＳＣやＳＳＷによる授業観察での見立てやＷＥＢＱＵのデータ分析などを通して、心理的な不安を感じている生徒の早期発見・早期支援につなげている。

また、親和的な学級作りの助言を得て、不登校の未然防止を図っている。

成果

当該生徒は、登校に向けて目標を自己決定し、実践することで、徐々に自信をつけることができた。現在は毎日登校し、教室で学習できるようになった。この生徒をはじめとし、様々な取組により、今年度登校できるようになった生徒は学校全体で８人いる。

課題

登校できるようになった生徒のケアを継続して行うことと、この事例を振り返り、良かった点を今後に生かすことが課題である。

不登校児童・生徒支援事例報告書

支援チーム構築で対応した取組について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学校１年生の３学期から生活リズムの乱れをきっかけに不登校になった。不登校担当教員を中心に、支援チームを担任・スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラー等で構築し支援に取り組んでいる。登校支援・家庭訪問・保護者や生徒支援・生活リズム改善のための支援など、役割分担を行い、組織的に対応している。

具体的な取組

生活リズムの改善を目指し、登校を促す支援方針の下、管理職・不登校加配教員・担任・養護教諭・SC・SSW・特別支援専門員・特別支援教室巡回指導員での支援チームを作り、生徒と保護者の相談や困り感に寄り添った。

学校に登校できても教室に入れない時は、保健室などの別室で、自主学習をしたり、担任と話をしたりした。生活リズム改善のために、毎日の起床・就寝時間を「じぶんログ」という生活記録ノートに記入し、自己管理を促した。

オンラインを用いて、自宅と学校をつなぎ(ビデオ通話)、対話をしながら生活リズムの大切さについて、本人と共に考えた。起床・就寝の時間を決め、実際に行動に移したことで、昼夜逆転の生活を改めることができた。

その結果、夏休みには宿泊行事に参加することができた。

年間１回の保護者アンケート（学校評価）と年間３回生徒アンケート（６月、11 月、２月のふれあい月間のアンケートを含めて）を実施して、「不登校の未然防止に向けた魅力ある学校づくり」の視点による教育活動の改善策を不登校加配教員がとりまとめ、校内で発信をしている。

成果

不登校加配教員が家庭と学校との連携を積極的に行うとともに、SSW による家庭訪問など組織的な対応につなげることで、担任以外との関わりの機会を設けることができた。支援の結果、生活リズムの見直しができたことや、当該生徒・家庭との良好な関係が築けたことは成果である。

課題

継続して生活リズムを習慣化することが難しい。家庭での支援が十分に得られないこともあり、保護者にも寄り添う支援が必要である。